

B - S L I Mの考え方を基盤に 「調べ学習」を位置付けた英語活動の創造

小 山 俊 英
K O Y A M A T O S H I H I D E

(旭川市立日章小学校 教 諭)

1 日章小学校の英語活動の特色

本校は、平成7年度から3年間、文部省（現文部科学省）の小学校英語活動研究開発校の指定を受け、英語活動の実践に取り組みました。しかし私たちが目指す「英語嫌いをつくらない」「楽しく英語を身に付ける」ところには、なかなかたどり着くことができませんでした。そこで平成12年度からこれまでの英語活動を見直し、新しい指導方法の開発・実践に着手し現在に至っています。

本校の英語活動の特色は以下の通りです。

国際理解教育と関連付けながら構成する英語活動

児童が使ってみたいと考える英語を素材に、「調べ学習」を取り入れた英語活動の学習過程

B - S L I M理論を採用し、その考え方を基盤とし、教師誰でもが実践できる英語活動

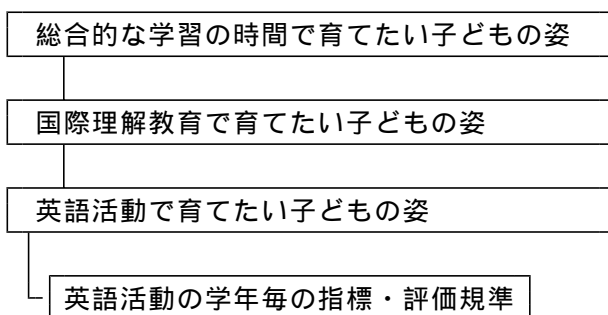
「English Immersion Classroom」に可能な限り近づけた英語活動室

英語活動を効率よく進める様々な形態のT T（=チームティーチング）の実施

「ノングレード・カリキュラム」の編成と系統的な指導を支える「スタディーメモリアル」

2 B - S L I Mと「調べ学習」を取り入れた経緯とその目指すもの

本校では、現在学校教育の中で求められている「生きる力」を「やりぬく力」「かかわる力」「あrawす力」の3つの力で育まれていくものと考え、



それぞれの具体的な子どもの姿については、パワーポイントによる発表を参照してください。

を設定し、実践に繋げています。

本校では、指導方法の改善の方策として、指導方法を共有化し、学級担任誰でもが英語活動を行うことができるようになることを願い、B - S L I Mを採用し、校内研修や研究授業を重ねました。A L TやJ E Tが中心となる英語活動から、学級担任が積極的に英語活動に関わり、授業実践を進めようとする意識改革の期待もありました。また一方で、児童にとっては、楽しい Activity の中で英語を身に付け、活動意欲やコミュニケーション能力を高めていくことができるような英語活動の創造を目指しています。「英語嫌いをつくらない」を合言葉に、全教師一丸となって教材開発や活動構成に取

り組んでいます。(B - S L I M採用の経緯，その背景となるH・T E P事業については簡単に後述してありますので参考にしてください。4 P参照)

本校では，総合的な学習の時間（国際理解）の単元と関連付けながら英語活動を実践し，児童が使いたいと考えている英語を素材に単元や1時間の活動を構成しています。

そのためアクティビティーの開発や授業の計画・picture chart等の教材・教具の準備を日常的に進めていく必要があります。時間をあまりかけずに，効率のよい教材開発につながるという観点においても，B - S L I Mは，私たちにとって優れた指導方法であると考えています。

さらに，児童のニーズに対応できるように，本校では，20題材40コース（Basic course / Advanced course）の題材一覧表（ノングレード・カリキュラム）を作成し，その中から児童が担任と話し合いをしながら題材を選び，「調べ学習」に繋げていきます。

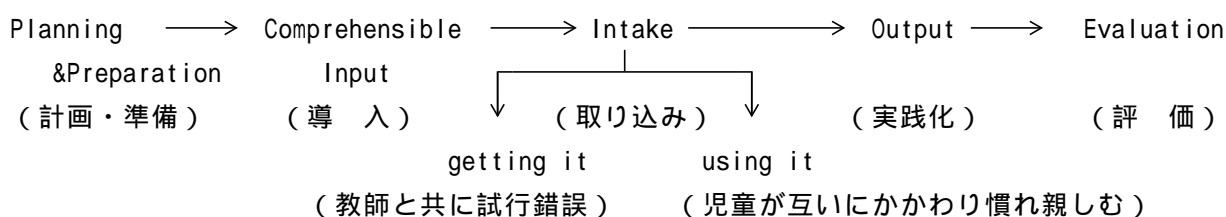
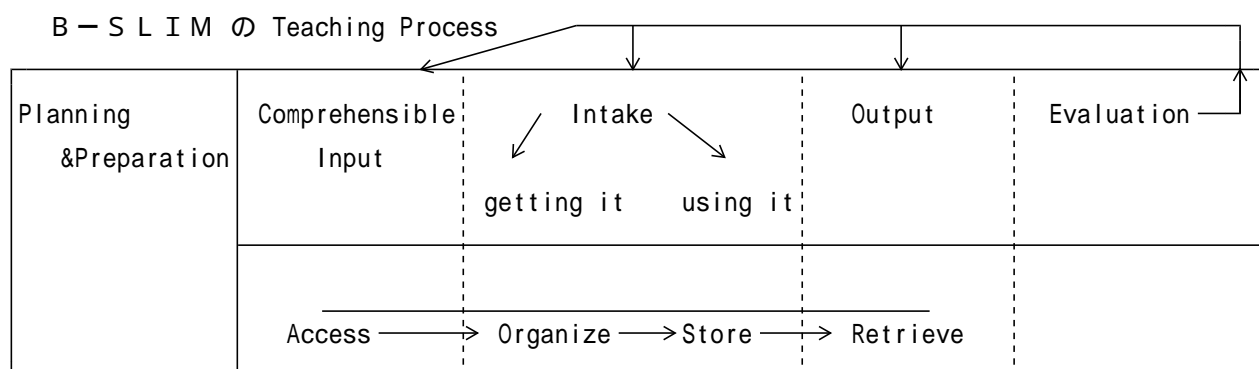
また 英語活動を行う教室の環境整備も大切です。本校では，「ななかまどルーム」を英語活動室として使用し，児童が英語を身近に感じ，英語に慣れ親しむことのできる環境作りを心がけています。

3 B - S L I M とは

E S L（English as a second language = 第2言語）の基礎理論であるB - S L I Mは，カナダ・アルバータ州立大学のオレンカ・ピラッシュ博士の教授モデルです。

Bilash's Second Language Instruction Model の頭文字をとり，B - S L I Mと名付けています。

本校では，英語活動を支える理論として，平成13年よりこの考え方を導入，共通理解したうえで，教材やアクティビティーの開発及び指導方法の改善に着手しています。



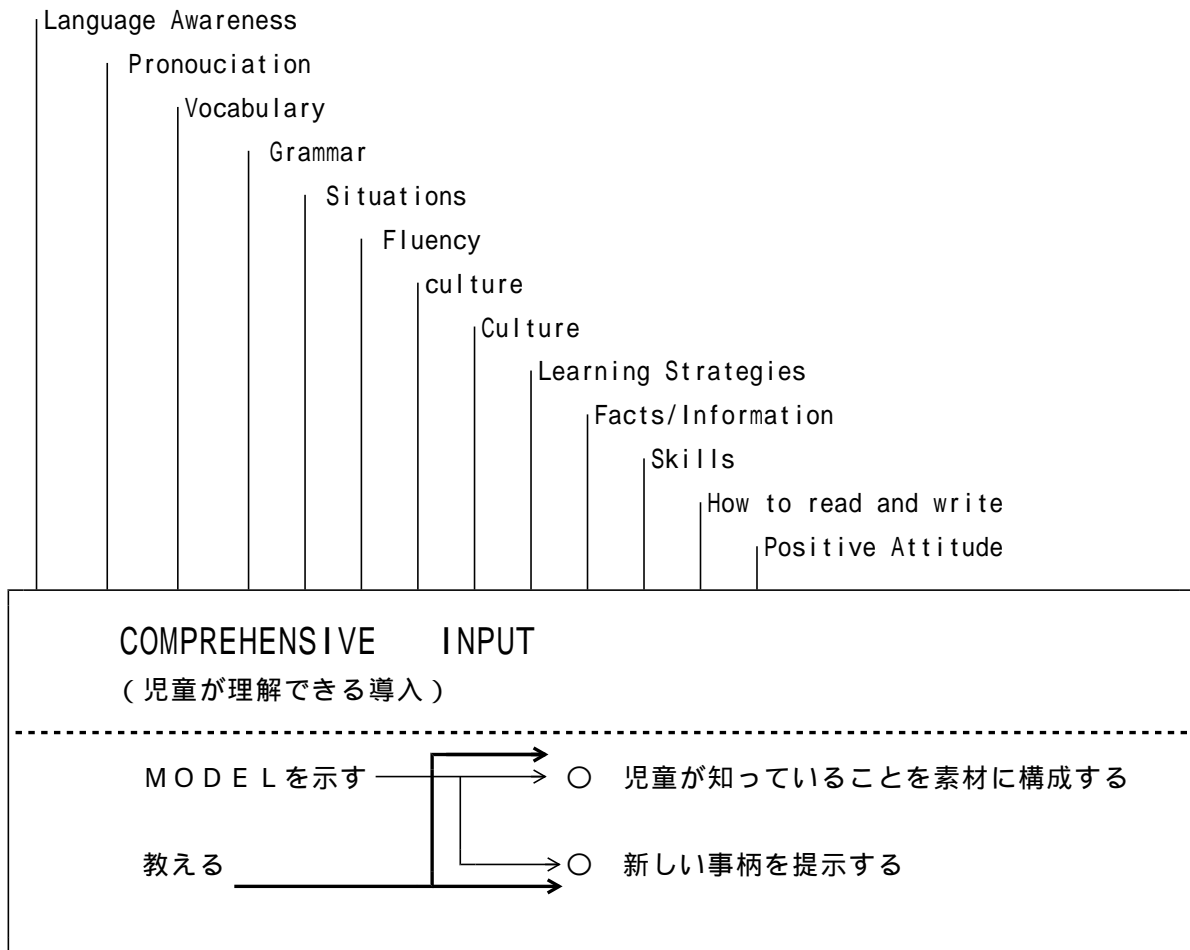
B - S L I Mは，1時間の学習活動の流れを示すだけでなく，単元を構成する際にも応用できるものです。

PlanningからEvaluationまでの流れは直線的なものではなく，なかでもIntakeの段階では，first getting it first using it next getting it next using it・・・Output というように繰り返し短い時間で行われ，スモールステップで進んでいきます。流れの途中でフィードバックすることもあります。

Access（覚える） Organize・Store（蓄える） Retrieve（思い出す）は課題に向かう児童の意識の流れを示し，心理学的な記憶の側面にも目を向けています。

Planning & Preparation

Input

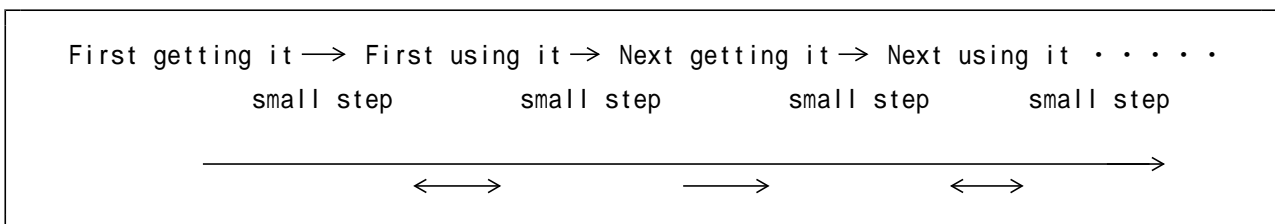


児童に新しい事柄を提示するとき (Inputの段階) の配慮事項

Using visuals	(視覚や聴覚に働きかける教材を用いる)
Repetition	(繰り返すことで言葉の獲得を助ける)
Same Order	(Inputの段階では、覚える順番を変えずに進める)
Modeling	(モデル～説明の後、モデルを提示し児童の理解を助ける)
Movement	(体の動き～記憶のための工夫として取り入れる)
Rhythm	(リズムは記憶の助けとなる。本校ではInputの段階でチャンツを取り入れている)

Intake

この段階では、目標に対して少しずつ繰り返しながら、難易度を高めていく必要があります。本校では次のようにActivityを構成しています。



Intakeの段階での配慮事項

Practice (練習) ~ この段階では多くの練習を必要とします。開発したactivityを効果的に配列し、児童が楽しさを感じる中で目標に近づくことができるようにする

Breaking learning into small chunks

~ 一度に多くのことを詰め込みすぎないように、学ぶことを小さなまとまりにする。

Activities are structured for success

~ Activityを通して児童が成就感を持つことができるように計画する。

Psychologically safe (のびのびと思いを表出できる雰囲気)

~ 児童が安心して英語を話す雰囲気づくりは、Intakeの段階では最も重要である。

多様な学習形態 ~ 全体・グループ・ペア・一人で行う活動为目标に合わせて、効果的に組み合わせる。

教師の支援 ~ 本校では、児童に支援を行う際は、次の点に配慮している。

- ・ Weak studentへのかかわり (個別の支援)
- ・ Praise (賞賛)・Encouragement (励まし)
- ・ Guidance (指導)
- ・ Personalized positive feedback (個々に応じたフィードバック)

Output

Output (実践的活動) は、全ての英語活動の時間で行われるものではありません。本校では、Outputの場を設定できる時に限り、Outputを位置づけています。例えば

- ・ フレンドシップパーティーに参加し、そこに参加している外国の方と会話をする。
- ・ 学級の交流集会に外国の方を招き、そこで外国の方と会話をする。
- ・ 冬まつりで行われる世界氷像コンクールの製作会場を訪れ、そこで外国の方に旭川市の印象等をインタビューする。

等々です。

Evaluation

Evaluation (評価) には、定期的に行う評価と不定期に行う評価とがあります。本校では主に活動の最後に相互評価や自己評価を位置付けています。

しかし本来、B - S L I Mでは、Intake(getting it ・ using it) Output それぞれの段階で、Evaluationを行い、フィードバックをしたり、次に進む段階を決定したりすることが求められています。本校では、InputおよびIntakeの段階では、教師の「見取り」による評価が中心であり、今後Evaluation の在り方について、実践的な研究を進めていく必要があると痛感しています。

なお本校の英語活動のバックボーンとなっているB - S L I Mは、北海道教育委員会のH・TEP (Hokkaid Teachers English Program) 事業の一環で、平成13~14年度北海道の小学校教諭20名をカナダ・アルバータ州立大学に派遣し、小学校英語活動の在り方を研究し、帰国後の実践をもとに小学校英語活動の手引書『ハロー・イングリッシュ』を執筆・発刊しました。本校からは、小山がこの事業に参加しました。北海道教育委員会は、北海道の全小学校に、この書籍を配布し、小学校英語活動の推進を積極的に支援しています。また道立教育研究所では、オレンカ博士を講師に迎えての「カナダESL講座」を開催し、今年で3年目を迎えます。この指導方法は、北海道で着実に根をおろし始めています。

4 日章小学校の英語活動の流れ – 「調べ学習」を位置付けて

・ 本校の英語活動の例

Greeting	
Warming Up	
~ Song , Gesture , Review, Story telling	
Short conversation etc.	
課題の確認	
「調べ学習」の発表	
Input	
新しい言語材料の発音練習	
チャンツを使っの発音練習	
Intake	
○ Activity	
・ Swatting flies game	getting it
○ Activity (card game)	
・ Leader call game	getting it
・ Circle switch	getting it
・ ○○ basket	using it
○ Activity (pair activity)	
・ Do you have ○○ ?	using it
・ Three cards activity	using it
(Output)	
Evaluation ~ 自己評価・相互評価を中心に	
Greeting	

本校では、英語活動を総合的な学習の時間で行い(1・2学年は学校裁量の時間)、国際理解教育の単元とリンクさせながら取り組んでいます。

また、英語活動を行う際には、児童の「調べ学習」を位置付けるようにしています。平成11年度までは、月別の指導計画に基づき指導をしていましたが、総合的な学習の時間の「ねらい」や「めざす子供像」を実現するためには、「教え込む英語活動」から「児童が主体的にかかわることのできる英語活動」へ指導の在り方を転換していく必要性を感じ、現在の指導法を取り入れています。

本校では総合的な学習の時間の単元を構成する際に、問題解決的な学習の流れを可能な限り取り入れるようにしています。英語活動で「調べ学習」を位置付けたのも、問題解決的な学習の流れに少しでも近づけることで、児童の主体性や英語活動に向かう意欲を高めていきたいという願いからです。

一時間の英語活動の流れは、左記の通りです。指導の形態も様々で、ALTやJETとのTTで行うことも多くありますが、学級担任との役割を明確にした中で、活動を進めています。

- 学級担任 ~ 活動の進行・指示、児童の個別支援
- ALT・JET ~ MODEL, Native Sound Activity の進行

日章小学校の英語活動の様子をビデオをご覧ください。

5 成果

B - S L I Mや「調べ学習」を取り入れることで、以下の成果を得ることができました。

- ・ 教師全員が、英語活動に関わろうとする積極的な姿勢を持ち、B - S L I Mに基づいた英語活動を行うことが可能になりました。
- ・ 開発した教材を蓄積し、誰もが使用することができるため、教材開発・準備のための時間を節約することができました。また教材開発の質が向上し、内容も充実してきています。
- ・ 「スタディ・メモリアル」等の活用により、系統的な指導をすることが可能になりました。
- ・ 児童の自己評価を総合すると、常時95%以上の児童が、「わかった」「楽しく活動できた」と評価をしています。また授業のはじめや終わりの挨拶、朝の会等学校生活の様々な場面で英語を使う機会が増え、私たちが願う「楽しく英語を身に付ける」「英語嫌いをつくらない」が、着々と実現に向かっていきます。

6 旭川発一小学校英語活動共同実践

平成14年度より、旭川市内7校（春光小学校・新町小学校・緑新小学校・神楽岡小学校・東光小学校・大有小学校・日章小学校）上川管内2校（比布中央小学校・上富良野西小学校）でB-SLIMを軸とした英語活動の共同研究・実践を行っています。学校によっては、まだ英語活動が学校全体の取組となっていないため、この共同実践に参加された先生方個々の取組となっているところもありますが、授業交流や授業研究を行いながら、B-SLIMの理解を深め、質の高い英語活動の創造を目指しています。

実践を通して、先の日章小学校と同様の成果を得ることができています。指導方法を共有することにより、互いに開発した教材の交流やチームティーチングによる英語活動実践も行うことができました。先生方からは、『ALTに任せきりの英語活動』・『ただ何となく進めてきた英語活動』から脱皮する事ができたという喜びの声も届いています。

また、それぞれの学校においても、少しずつB-SLIMの指導方法が広がりを見せてきています。さらに、英語活動の後、児童の自己評価からも、「楽しく活動できた」「機会があればもっと英語を使ってみたい」「友達やゲストティーチャーと積極的に関わることができた」等と意欲を持って英語活動に取り組む姿を伺い知ることができました。

旭川東光小学校・春光小学校・大有小学校の英語活動の様子をビデオをご覧ください。

この研究会終了後、現在共同実践に参加しているメンバーを母体にして、Asahikawa English Education Network を立ち上げ、広く会員を求め、活動を深めていく予定です。現在英語活動に取り組まれている、いないにかかわらず、英語活動に関心のある方々の参加を期待しています。

7 英語活動アンケート（自己評価）より

英語活動を改善するための視点の一つに、児童の自己評価があります。日章小学校を含め4校で英語活動終了後、同一の自己評価を実施し結果を交流しました。結果は下記の通りです。

自己評価項目

英語活動に楽しく取り組むことができましたか。

英語活動の時に、友達やグループの仲間・先生・ALTの先生となかよくかわることができましたか。

英語活動を振り返って、英語で言えるようになったことがふえましたか。

またチャンスがあれば、英語を使ってみたり、ゲームを試してみたいと思いますか。

- 1 春光小学校 実施時期 2003.7 実施学年 6年生
（本年度4時間実施・・・4時間目・・・7月末段階）

評価項目	できた (思う・ふえた)	少しできた(少し思う・少しふえた)	できなかった(かわらない・思わない)
	91	9	0
	81	16	3
	64	30	6
	79	21	0

(数字は%)

2 東光小学校 実施時期 2003.7 実施学年 5年生

(本年度2時間実施・・・2時間目・・・7月末段階)

評価項目	できた (思う・ふえた)	少しできた(少し思 う・少しふえた)	できなかった(かわ らない・思わない)
	90	10	0
	35	65	0
	40	54	6
	86	8	6

(数字は%)

3 大有小学校 実施時期 2003.7 実施学年 6年生

(本年度5時間実施+朝の英語活動・・・4時間目・・・7月末段階)

評価項目	できた (思う・ふえた)	少しできた(少し思 う・少しふえた)	できなかった(かわ らない・思わない)
	75	25	0
	68	32	0
	61	39	0
	68	32	0

(数字は%)

4 日章小学校 実施時期 2002.9 実施学年 3年生(現4年生)

(昨年度26時間実施・・・12時間目)

評価項目	できた (思う・ふえた)	少しできた(少し思 う・少しふえた)	できなかった(かわ らない・思わない)
	86	14	0
	86	14	0
	93	7	0
	93	7	0

(数字は%)

5 日章小学校 実施時期 2003.6 実施学年 4年生

(本年度8時間実施・・・7時間目・・・7月末段階)

評価項目	できた (思う・ふえた)	少しできた(少し思 う・少しふえた)	できなかった(かわ らない・思わない)
	95	5	0
	90	10	0
	95	5	0
	90	10	0

(数字は%)

各学校で実施したことで、ほぼ同様の結果を得ることができましたが、これらはまだまだ資料としては十分なものとは言えません。児童の意識の概要をつかむ程度ですが、今後これを蓄積していくことで、英語活動や指導方法の改善につながっていくことと思います。

以下、この結果から現時点で考察できる点を列挙します。

英語活動に継続的に取り組み、ある程度の時間を確保することで、児童は活動の流れを知ることができ、安心した中で英語に取り組み、自信を深めることができるのではないのでしょうか。

この指導方法を取り入れることで、私たちが願う「英語嫌いをつくらない」「楽しく英語に取り組む」ことに近づいていると言えるのではないのでしょうか。

自己評価項目の充実を図り、評価の分析をどのように英語活動の改善に生かしていくのが今後の研究課題になると考えます。

8 おわりに

学校の枠を越えた研究を開始して一年余り。まだまだ課題は、山積しています。しかしながら、じっくりと地に足をつけた実践を進めることで、その課題を克服していくことができると私たちは考えています。

現在、小学校における英語活動は、大きな二つの流れの中にあると思います。一つは、私たちが現在進めている総合的な学習の一環としての英語活動です。もう一つは、「小学校英語科」、いわゆる教科としての英語活動です。小学校に英語が教科として導入される時期については、様々な情報が飛び交っています。また、将来を見越して？英語を教科と同様の扱いで導入し、実践している学校の話も多く耳にします。しかしながら、今私たちが向かう方向は前者であり、総合的な学習の時間（国際理解教育・英語活動）を通してどのような子どもを育てていきたいのかを明確にし、実践を積み上げる必要があると考えます。

過日 J A S T E C（日本児童英語教育学会）全国大会で、研究発表をさせていただく機会を持ちました。そこで本校の実践の在り方を高く評価していただきました。また昨年来、国際交流財団「馬場賞」、下中科学財団研究助成、そして日本英語検定協会研究助成を受賞したのも、本校の研究の方向性が誤っていないことの証であると教職員一同自信を深めているところです。しかし一方で、優れた多くの先行実践に謙虚に耳を傾けながら、実践の質を高めていくことを目指しています。

今回、大変貴重な機会を提供いただいたことに感謝し、参加した多くの先生方からの御教唆をお願いしたいと思います。

参考添付資料 B - S L I M 全体構造図 (P 9)

日章小学校英語活動題材一覧表 (P 1 0 ~ 1 2)